様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：４４３０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０６８５

研究課題名（和文）音読・要約を核にしたシステム英語指導法の提案―「名人教師」の分析をもとにして―

研究課題名（英文）Systematization of an English Lesson Centering on Oral Reading and Summary Making-Based on the analysis of master senior high school teachers-

研究代表者
安木　真一（Yasugi, Shinichi）

京都外国語短期大学・キャリア英語科・教授

研究者番号：７０６３７９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：研究の目的は「受験指導とコミュニケーション能力向上のための指導」を両立している「高校名人教師」の指導法を参考に、「音読・要約を核にした指導法」を確立することであった。安木(2014)で高専における音読指導を中心とした授業の実践例と、それを一般化し、システムとして授業を行う方法を提案した。しかしスローラーナーの中に授業に興味を失うものがあった。安木(2016)で、質的側面から分析し、スローラーナーへの指導法としてスピーキングが有効であることが判明した。安木(2017)でスローラーナーの指導にも配慮した指導法を提案した。最終年度には研究成果を還元するためのフォーラムを開催した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to present a model of an English lesson centering on oral reading and summary-making, based on the analysis of master senior high school teachers who can teach English for both communication and preparation for university entrance exams.
Yasugi (2014) proposed practical examples of classes focusing on oral reading at a college of technology, generalized upon these, and proposed a method of teaching that was systematic. The problems with these examples were that some slow learners were not able to catch up with the class. Yasugi (2016) investigated the ways of teaching, as well as the concepts of teaching and learning, of the master high school English teachers. This study revealed that speaking was effective as a teaching method for slow learners. Yasugi (2017) proposed a teaching method suitable for slow learners. In the final year of this investigation, a forum was held to present the findings.

研究分野：英語教育

キーワード：英語指導法　名人教師　音読　要約

１．研究開始当初の背景

日本の英語教育を改善するために、文部科学省は「英語のできる日本人の育成」計画に代表されるコミュニケーション能力を育成するための指針を表明し、これに基づいた現職英語教員の再トレーニングプログラム（悉皆研修）を実施した。それを受けて、学習指導要領に沿って、生徒の英語のコミュニケーション能力を育成するために努力している高校の教師も少なくなかった。また当時 2013 年度より新学習指導要領が高校にも適用されることになっていたため「英語の授業を英語で教える」ための準備として自主的に研修に取り組んでいる教師も多くいた。しかし、一方で、日本の英語教育では大学入試が高校の英語教育に大きな影響を与える Back Wash Effect が見られ、大学入試突破を目指した英語の授業が広く行われており、また公立学校復権に向けて極端な受験対策指導が始まっていることも事実であった。このため心ある英語教員は悩みながらも「コミュニケーション能力も育成し、大学入試にも対応できる」授業を模索していた。しかしその壁は非常に厚く、実際には入試対策に追われ、コミュニケーション能力育成にまでは手が回らない教師が多数を占めるのが実情であった。しかしこのような状況の中でも大学受験指導とコミュニケーション能力の育成を両立している教師が当時からいた。このような教師の指導法を実証研究のデータと比較し分析することで、よりよい指導法を開発する必要性を感じた。

先行研究では高校英語教育における両者の両立に関しての研究、両者の両立のための指導法の提案は最近散見されるようになってきていた。筆者はこの問題に取り組んできた。安木(2000)では、４技能統合型の授業を高校３年間実施し大学入試に好成績を挙げた実践例を報告した。安木(2001)で音読指導を中心にして表現活動に至る指導法と、訳読中心の指導法を長期間実施した場合、前者の方が総合成績において有意に得点が向上したことを明らかにし、更に音声中心の指導法で受験勉強に対応できることを明らかにした。安木(2007)ではまず現在の高校、特に進学校における、コミュニケーション能力育成と受験対応についての英語指導上の問題点を指摘した。次に入試問題を分析し、いくつかの問題点を指摘した。その後いくつかの提言を行った。安木(2008)では高校入学直後のテストの中で、中学レベルの例文を英作させ、その結果とそのテストの総得点並びに、その後実施したテストの総得点との相関を調べた。その結果、例文の部分の得点とそのテストの総合点並びにその後のテストの総合点と高い相関がある事がわかった。これは中学レベルの例文暗唱が、その後の英語力と関係している可能性のあることを示唆している。これを参考に文の暗誦のためのリードアンドルックアップのような高次の音読指導を含めた音読の指導順序を提案した。またこの指導順序は名人の指導順序と一致していた。しかし名人へのインタビューで抽出された、要約指導の研究は、現在高校の現場で注目されている指導法であるにもかかわらず、山岡他(2010)にみられる程度であった。また高校の名人の授業を動機付けの観点から分析した先行研究は調査したがなされていなかった。

２．研究の目的

本研究で明らかにされるのは現場の教師が授業で使用できる「音読と要約指導を核にした指導法」のモデルであった。このモデルを補完するための動機付けの方法も考察予定であった。音読に関しては名人のインタビュー結果と音読に関する実証データを比較し、更に筆者が実践することで指導に関するモデル作成はほぼ終了していたがこれを更に分析する必要があった。この成果は安木(2010)で発表し、当時で 10 刷りとなり現場の教師の圧倒的支持を得ていた。要約指導に関しても検証が必要だと感じた。動機付けに関してはあくまで指導モデルを補完するものであるが、名人へのインタビュー、大学入学後の学生へのアンケート、名人の生徒へのインタビューの３者を比較することで仮説を生成し、筆者の実践の中で試すこととした。

３．研究の方法

受験指導とコミュニケーション能力の両立に関する報告は研究開始時点で散見されるようになった。現場の教員は新指導要領に対応すべく、受験指導とコミュニケーション能力を両立すべく奮闘し、中には実践報告を記している者もいた。しかしいずれの報告も、応用言語学や英語教育学の先行研究の実証データに基づくものではなかった。本研究の特徴はコミュニケーション能力と受験に対応する力を両方とも育成している高校教師の教授方略、授業観・学習観を検証するという質的な研究を行うと同時に、そこからでてきた知見と、英語教育学や応用言語学の実証データ、更に独自に行う実証データを比較し、その有効性を実証した上で、高等学校のみならず、中学校、高等専門学校、短期大学、大学の教室で使用できる、新たな英語授業のモデルを提供することにあった。質的な研究を量的な研究と適合させて、授業モデルをつくり現場に還元するという点で斬新なアイデアを有していると判断できた。

本研究により高等学校や高等専門学校において、現場の教師が自信を持って授業を行う方法を提示することを目標とした。研究の大きなイメージとしては下記のように考えた。

従来の教育実践と本研究に基づく実践の差

従来の実践
他の実践→　模倣　　→　　実施
→　うまくいかない場合が多い

本研究に基づく実践
名人技検証→実証研究と比較検証
→ 方法提示→実践→検証→方法提示
→成功可能性が高い

従来の現場の教師の実践では、自分の経験値や、他の実践を模倣する事が多かった。バックボーンに英語教育学の知見や実証データがないため、実践をしても自信を持って実施することができず、更に新しい実践を模索することを継続することになった。本研究に基づく実践の場合は、名人技を実証研究と比較し検証する中で方法を提示するため、各現場教師がよりよい授業をできる可能性が高くなると考えた。名人教師の技から抽出された技を科学的に分析し、音読や要約に関する実証研究と比較することで中高大、高専の英語教育で使用できる更によいモデルを提供することができると判断した。

４．研究成果

2013 年度には「高校英語教育における名人教師の教授方略・授業観・学習観」について授業観察の後に面接調査をすることにより明らかにした。教師へのアンケートを参考に作成した項目より、受験指導とコミュニケーション能力の指導を両立するための要因を大きく指導技術と発想と教材の３つに分けた。それらの点について名人教師３名に面接調査することにより明らかにした。指導技術で注目すべきなのはいずれの教師もリーディングを核にしながらもその他の技術、特にスピーキングの大切さを主張していることであった。教材に関しては、３名の内２名が教科書や既存の教材が中心であるのに対して、１名はテーマ学習の中で自作プリントを活用していた。発想で特徴的なのは、「受験指導」や「コミュニケーション能力」といった小さな範疇だけでは英語教育を捉えておらず、更に大きな人間教育や言語教育の中で英語教育を捉えていることであった。上記の中で特に本研究のテーマである「音読指導」について考察を深めた。音読を核にした授業のために必要な音読指導の方法に関して、名人教師の音読指導法を先行研究並びに、大学生へのアンケートと比較し、音読指導を中心とした指導を行う際の留意点を確認した。調査の結果名人の指導法は、大学生が高校時代に受けた指導法より、先行研究で有効性が実証された指導法に近いことがわかった。これを元に高等専門学校の教室で使用できるシステムとしての音読指導法を提案した。上記２点を明らかにすることで、高校での受験指導とコミュニケーション能力育成の指導の両立、更に高専での TOEIC 指導とコミュニケーション指導の両立についての概念的なバックグラウンドや具体的指導法をある一定のレベルまで明らかにすることができた。両研究とも学会にて報告し、後者の音読指導に関しては安木(2014)で全国高等専門学校英語教育学会研究論集に掲載された。またこの年度には全国英語教育学会北海道大会で裏面書写の有効性について明らかにし、音読から要約へと至る道筋で裏面書写を加える必要性が実証された。この年度に提唱した指導の道筋は以下の図である。

高専における英語授業のシステム(安木　2014)

単語練習→音読による復習（前々時：シャドーイング前時：オーバーラッピング 代表生徒による前時のリプロダクション実施）→リスニング（QA・グラフィックオーガナイザー）→内容理解（QA・グラフィックオーガナイザー・フレーズ訳）→全体音読（リッスンアンドリピート→音声確認リッスンアンドリピート→オーバーラッピング）→重点部分音読（イチゴ読み→オーバーラッピング→バズリーディング→クローズ音読→ペア型リードアンドルックアップ→ アウトプット活動（ストーリーリプロダクション→変形英作文→裏面書写）

2014 年度には主に以下の研究を実施した。

まず昨年度名人教師３名へのインタビューを実施し、それについて英語授業研究学会で発表した、更に分析を深めた。指導技術で注目すべきなのはいずれの教師もリーディングを核にしながらもその他の技術、特にスピーキングの大切さを主張していることであった。教材に関しては、教師Ａ、教師Ｂが教科書や既存の教材の中心であるのに対して、教師Ｃはテーマ学習の中で自作プリントを活用していた。しかし教師Ａ、教師Ｂも教科書や入試問題をベースに、教材を広げる活動を様々なステージで行いテーマを重視していた。発想で特徴的なのは、「受験指導」や「コミュニケーション能力」といった小さな範疇だけでは英語教育を捉えておらず、更に大きな人間教育や言語教育の中で英語教育を捉えていることであった。また「英語の授業を英語で教える」ことに関して、いくつかの観点から慎重な態度をとっていることもスーパーイングリッシュランゲージハイスクールですべて英語による授業を実施し、高い評価を得た教員の意見であるので特筆に値すると感じた。生徒の成長を確かな方向へ導くしっかりとした人間観、社会観、言語観が根底にあり、技術論はその先にあると感じられた。これらの点を深めるために３名の内１名の授業観察と面接調査を再度実施し更なる分析を実施した。

これらの分析を元に高等専門学校の授業においてスピーキングをペア活動やグループ活動の中で実施することで動機付けする方法を吟味した。この結果特に有効であった指導法は「ネイティブぴったし音読」「インテイクリーディング」「列毎発表音読」「輪読」であった。また事前テストと事後テストにおいて「理解を伴ったリーディングスピード」は有意に向上した。これに関しては全国高等専門学校英語教育学会において「高専英語授

業におけるスピーキング指導の工夫;高校名人教師の分析をもとにして」のタイトルで発表した。

2015 年度には研究から出てきた高校英語教育における名人教師の指導法に関してインタビューした内容を論文にまとめることと、名人教師の指導法の分析から出てきた指導法を、高等専門学校における英語指導の中で実施し、指導法を完成することを目指した。更に実践の中から出て来た問題点に関して探索した。名人教師へのインタビュー結果については安木(2016a)で「高校英語教育における名人教師の教授方略・授業観・学習観の研究」のタイトルで発表した。安木(2013)並びに昨年度の本報告を元にしている。名人教師の指導法を高等専門学校の授業の中で実施することに関しては、インタビューの中から動機付けの鍵として出てきたスピーキング指導を軸に実践を行い、全国高等専門学校英語教育学会で「高専の英語授業で有効な指導法の研究―高校名人教師の分析をもとにして―」のタイトルで発表した。実践の結果理解を伴ったリーディングスピードが有意に向上した。また実践の中から問題点として出てきたスローラーナーの指導に関しても研究を開始し、2015 年度中国地区英語教育学会で発表を行うと同時に、安木(2016b)で「英語学習者の文法上のつまずきを減らすための提案―中学校英語教科書基本文テストの分析から考える―」のタイトルで投稿し、掲載された。これらの研究を元に中高の現場の先生に研究成果を還元するために、2016 年 3 月に外国語教育メディア学会の中高の先生対象の１日セミナーで具体的な授業方法について提案した。

2017 年度には、前年度までの研究を踏まえ、未解決部分を補完した上で、研究成果を社会に還元し、最終的なモデルを提示することを目標とした。未解決部分の一つは、内容理解の方法であった。QA によるだけではなく、グラフィックオーガナイザーの使用と、アウトプット活動においてストーリーリプロダクションを行うこと自体が内容理解の確認になるという方向性を得た。研究成果に関しては、論文や講習会で、開発した指導技術を伝えるとともに、研究協力者の高校教員の協力を得て、『「受験指導とコミュニケーション能力育成を両立する熟練高校教師」から学ぶ英語教育フォーラム』を開催した。

P(Presentation) → C(Comprehension) → P(Practice)→P(Production)による指導を更に細分化し、中高の教科書を利用したモデルとして以下のように提案した。まず「概要学習」は Presentation1 で、本文の重要文法事項に関する導入、本文全体の重要単語の導入、本文の内容の導入を行う。「個別学習（各セクションごとに実施）」は、Warm-up で、授業に学生が入り込めるようにするための様々な活動を行い、Presentation2 でそのセクションに入るためのプレゼンテーションを行い、Comprehension で「概要→詳細」の原則に基づく本文の内容理解と文法項目や重要表現を含む例文提示を行う。Practice で、さまざまな音読を実施し、Production1 で、本文の内容をスピーキング活動につなげるために、まとめの活動を行う。「発展学習」では Production で 1 課の本文全体の発展学習を行い、インタビューテストなどの評価活動と連携した評価を行う。この指導法を前年度の高等専門学校 2 年生の授業で検定教科書を用いて 9 ヶ月実施し、学生の読解力向上を確認した。指導法のモデルは以下のようになる。

実践のモデル(安木　2017)

概要学習	個別学習（各パート毎）	発展学習
Presentation1	Warm-up→Presentation2→Comprehension→Practice→Production1	Production2 →Interview Testなどの評価活動

本研究の目的は「高校英語教育における名人教師」の教授方略・授業観・学習観から知見を得ながら、音読・要約指導を核にした指導法のモデルを提示することであった。大枠としてのモデルや指導技術はほぼ目的通りに提示されたと言える。本研究の独自性は、音読から要約にいたる指導法の道筋を綿密に提示し、特に中学と高校の教員が検定教科書を用いて綿密に指導できる道筋を提示したことにある。音読や要約の指導法について述べた先行研究や実践報告はあるが、その前後の活動まで踏まえて、実証的に指導法やその裏にある指導観を提示したものは見受けられない。ここにこの研究の独自性があると言える。

引用文献

安木真一(2000).「高校３年間でいかにして英文和訳から脱却するか」斎藤栄二・鈴木寿一編著『より良い英語授業を目指して』

安木真一(2001).「フレーズ音読を中心にした授業の効果と問題点」Step Bulletin, 13, 84-93

安木真一(2007).「 コミュニケーション能力育成と受験対応を両立している名人教師から学ぼう！」 STEP 英語情報.日本英語検定協会

安木真一(2008).「音読指導における指導順序の提案」第 34 回全国英語教育学会東京大会発表要項, 216-217.

安木真一(2010).『英語力がぐんぐん身につく！驚異の音読指導法 54』東京：明治図書

安木真一(2014). 「高専における音読中心の授業のシステム化－高校名人教師の分析をもとにして」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』33 号,49-58

安木真一 (2016a).「 高校英語教育における名人教師の教授方略・授業観・学習観の研究」『津山工業高等専門学校紀要』57,37-43

安木真一(2016b).「 英語学習者の文法上のつまずきを減らすための提案−中学校英語教科書基本文テストの分析から考える」『中国地区英語教育学会研究紀要』46,79-87
安木真一(2017).「工業高等専門学校における音読中心の 4 技能統合型指導の実践」『―スローラーナーへの指導に配慮して―』47,
山岡大基・寺田義弘.(2010). 「要約指導法定式化への挑戦」第３６回全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集，302-303，全国英語教育学会

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）
1.安木真一(2017).「工業高等専門学校における音読中心の 4 技能統合型指導の実践」『―スローラーナーへの指導に配慮して―』47,105-113　査読有り
2.安木真一(2016).「 英語学習者の文法上のつまずきを減らすための提案ー中学校英語教科書基本文テストの分析から考える」『中国地区英語教育学会研究紀要』46,79-87　査読有り
3.安木真一 (2016).「 高校英語教育における名人教師の教授方略・授業観・学習観の研究」『津山工業高等専門学校紀要』57,37-43 査読有り
4.安木真一(2015).「音読で活躍する教材」『英語教育 10 月増刊号』21-23 査読無し
5.安木真一(2015).「音読を中心にした４技能統合型の授業」『全国英語教育学会第 40 回研究大会記念特別誌　英語教育学の今―理論と実践の統合―』431-433　査読無し
6.安木真一(2014).「高専における音読中心の授業のシステム化－高校名人教師の分析をもとにして」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』33 号,49-58　査読有り

〔学会発表〕（計 9 件）
1.　2017/1/28　「受験指導とコミュニケーション能力育成を両立する熟練高校教師」から学ぶ英語教育フォーラム−SELHi 以降の１０年間を振り返りながら−（京都外国語大　学・短期大学安木真一研究室主催科研フォーラム） キャンパスプラザ京都（京都府･京都市）竹下厚志，西巌弘，平尾一成，安木真一
2.　2016/08/20　高等専門学校における音読中心の４技能統合型指導の実践―スローラーナーへの指導に配慮して―（全国英語教育学会第４２回埼玉研究大会） 獨協大学(埼玉県・草加市) 安木真一
3.　2015/09/13　高専の英語授業で有効な指導法の研究 −高校名人教師の分析をもとにして−（第 39 回全国高等専門学校英語教育学会研究大会）京都府中小企業会館（京都府・京都市） 安木真一
4.　2015/06/27　中学校教科書基本文テストの分析から考える中高生への語順指導の方（第４６回中国地区英語教育学会鳥取大会）鳥取大学（鳥取県鳥取市） 安木真一
5.　2014/09/14　高専英語授業におけるスピーキング指導の工夫−高校名人教師の分析をもとにして−（第 38 回全国高等専門学校英語教育学会　研究大会）国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都・渋谷区） 安木真一
6.　2014/06/21　どの文法項目が中学生の英語力を左右するのか　―中学英語検定教科書の基本文の分析から考えるー（第 45 回中国地区英語教育学会島根大会）島根大学（島根県・松江市） 安木真一
7.　2013/11/17　高校英語教育における名人教師の教授方略・授業観・学習観の研究―インタビューから考える（英語授業研究会関西支部 25 回秋季研究大会）　大阪樟蔭女子大学（大阪府・東大阪市）安木真一
8.　2013/09/21　高専における英語授業のシステム化‐高校名人教師の分析をもとにして（第 37 回全国高等専門学校英語教育学会　研究大会）京都府中小企業会館（京都府・京都市）　安木真一
9.　2013/08/10　英文の裏面書写の授業への応用に関する研究（第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会） 北星学園大学（北海道・札幌市）　安木真一

〔図書〕（計　1　件）
安木真一(2014).『英語力がぐんぐん身につく！驚異の英単語指導法 50』東京：明治図書 118 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
安木　真一(YASUGI, Shinichi)
京都外国語短期大学・キャリア英語科・教授
研究者番号：７０６３７９９１
(2)研究分担者
　なし
(3)連携研究者
　なし
(4)研究協力者
竹下　厚志(TAKESHITA, Atushi)
神戸龍谷高等学校教諭

西　巌弘(NISHI, Ituhiro)
広島市立舟入高等学校教諭

平尾　一成(HIRAO, Kazunari)
大阪府立寝屋川高等学校教諭